

# 龍安寺御陵ノ下町遺跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







# 龍安寺御陵ノ下町遺跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、体育館建設事業に伴う龍安寺御陵ノ下町遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

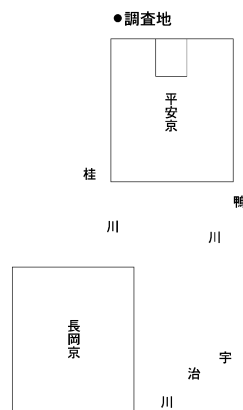
平成 22 年 9 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 龍安寺御陵ノ下町遺跡
- 2 調査所在地 京都市右京区龍安寺御陵ノ下町地内
- 3 委 託 者 学校法人立命館 理事長 長田豊臣
- 4 調査期間 2010年6月28日～2010年8月2日
- 5 調査面積 239 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 布川豊治
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「衣笠山」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし、柱穴列・礎石については別に番号を付した。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 布川豊治
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 調査地の位置と環境	2
3. 遺 構	3
(1) 基本層序	3
(2) 遺構	3
4. 遺 物	11
(1) 出土遺物の概要	11
(2) 出土土器類	11
5. ま と め	14

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1 調査区全景（北から）
		2 南区全景（東から）
		3 反転部北区北端（西から）
図版2	遺構	1 石組遺構49（東から）
		2 石列55・礎石2（北から）
		3 集石54（南から）
		4 土坑10（北から）
図版3	遺物	出土土器

## 挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 500)	2
図 3	調査前全景 (北西から)	3
図 4	調査風景 (北から)	3
図 5	調査区断面図 1 (1 : 50)	4
図 6	調査区断面図 2 (1 : 50)	5
図 7	遺構平面図 (1 : 100)	6
図 8	溝 5・23 断面図 (1 : 40)	7
図 9	柱穴列 1 実測図 (1 : 40)	8
図 10	土坑 41 実測図 (1 : 40)	8
図 11	石組遺構 49 実測図 (1 : 40)	8
図 12	中世の遺構平面図 (1 : 200)	9
図 13	石列 55・礎石 2 実測図 (1 : 40)	9
図 14	礎石 1 実測図 (1 : 40)	10
図 15	集石 54 実測図 (1 : 40)	10
図 16	土坑 10 実測図 (1 : 40)	10
図 17	出土土器実測図 (1 : 4)	12

## 表 目 次

表 1	遺構概要表	3
表 2	遺物概要表	11

# 龍安寺御陵ノ下町遺跡

## 1. 調査経過

今回の調査は、立命館大学衣笠キャンパス新体育館建設事業に伴う発掘調査である。調査地は、京都市右京区龍安寺御陵ノ下町に所在する。京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を行ったところ、平安時代後期から鎌倉時代初期の南北溝などを検出した。文化財保護課では試掘調査結果から工事着手前に発掘調査が必要であると判断し、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け発掘調査を実施した。

調査は、2010年6月28日から開始した。文化財保護課の指導により、敷地の南寄りに南北18mおよび22m、東西13m、ほぼ台形状で面積268㎡の調査区を設定したが、排水管が調査区内の東西を横切り、その養生のためベルトを残した結果、調査面積は約239㎡となった。調査区はこの養生ベルトより北を「北区」、南を「南区」とした。また、排土置き場確保のため、北区の北端部幅2mは反転ののち調査した。遺構面は、南北溝を検出した深さまで機械掘削で除去した後、人力による掘削を行った。その結果、平安時代中期末から後期の南北溝2条、平安時代後期の南北溝1条、石組遺構、鎌倉時代の礎石、石を伴う土坑などを検出した。調査にあたっては、文化財保護課の指導を受け、遺構掘削、遺物採集、写真撮影・図面の記録を取り調査を進めた。その後、埋戻し、器材搬出を行い、2010年8月2日に全ての作業を終了した。



図1 調査位置図 (1 : 5,000)

## 2. 調査地の位置と環境

調査地は京都盆地の北部、衣笠山の南に位置し、南東約 250 m には等持院、北西約 350 m には龍安寺があり、立命館大学衣笠キャンパスの西端地区にあたる。調査前は駐輪場として利用され平坦地であるが、北側の集合住宅と約 3 m の段差があり、東側を走る道路は北から南へ降りる坂道であることから、旧地形は衣笠山の南斜面であったと考えられる。当地は龍安寺御陵ノ下町遺跡の北端に位置し、同遺跡は平安時代から鎌倉時代の瓦、室町時代の土師器などの散布地である。衣笠山の南西麓と一帯には、徳大寺という寺が平安時代中期からあったとされる。後期には左大臣藤原実能が寺院と山荘を営んだことに因み、「徳大寺殿」と称され、徳大寺家の祖となった。以後この地は、徳大寺家に伝領されたが、室町時代前半、細川勝元が譲り受け龍安寺を創建した。それとともに徳大寺は廃寺となり、その旧跡は荒廃していったとされる。

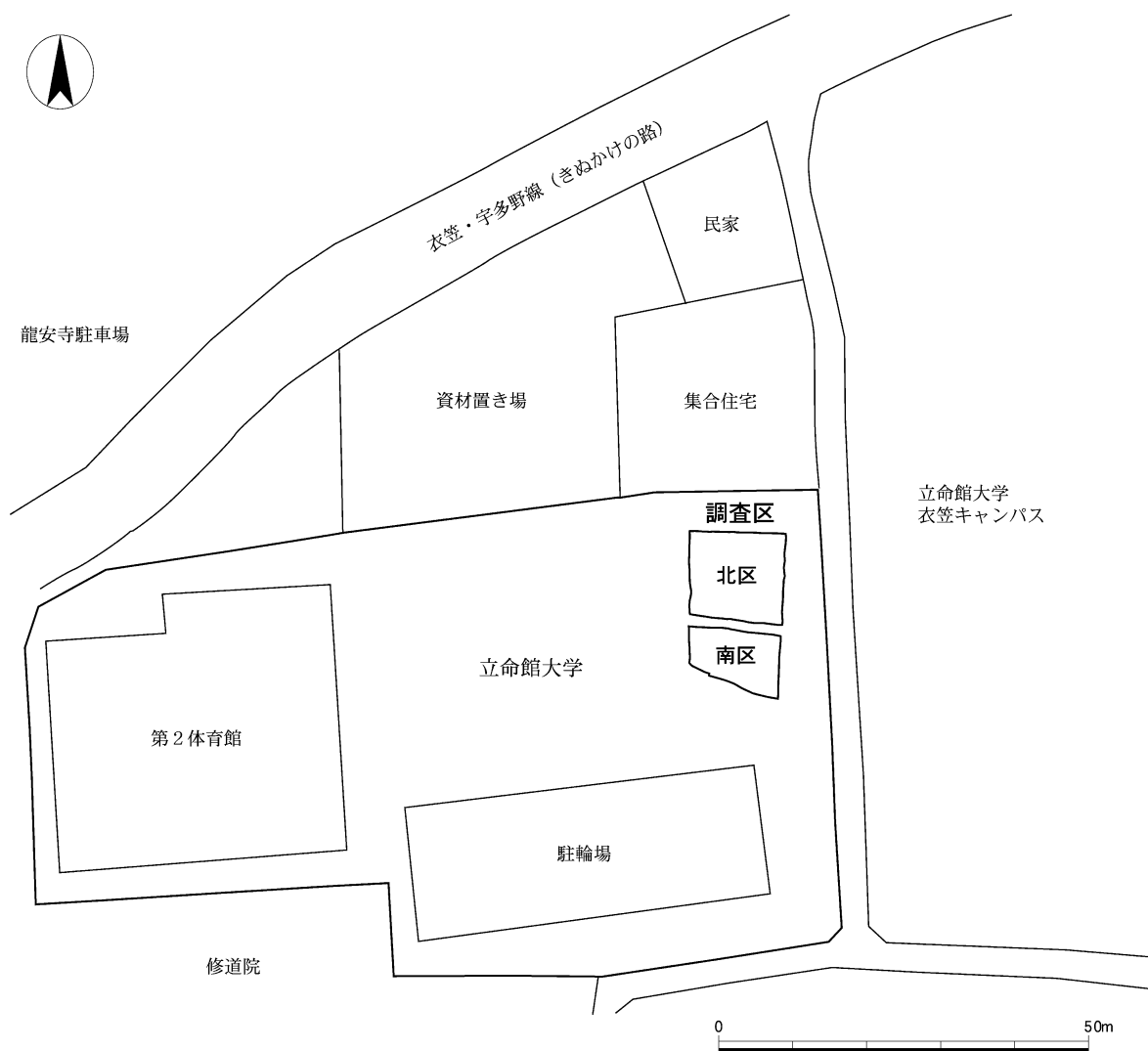


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 調査前全景（北西から）



図4 調査風景（北から）

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序

調査地は、ほぼ中央を境に北側を駐輪場、南側を樹木帯として使用されていた。駐輪場跡の地表面は、標高が約 81 m 前後で、東へ緩く下降している。南の樹木帯は、約 1 m の段差で低くなって、調査区南東部で標高約 80 m である。

南区北壁中央部の基本層序は、地表面から約 0.55 m が近現代盛土である。以下、褐色泥土（厚さ約 0.25 m）で中世から近世の層（図 6 - 10 層）、上面に礫が多く混じる褐色泥土（厚さ 0.1 ~ 0.15 m）で中世の層（同 11 層）、黄褐色泥土（厚さ約 0.07 m）の径約 3 cm 以下の礫が多量に混じる層で路面（同 16 層）、にぶい褐色泥土（厚さ 0.1 ~ 0.15 m）で基盤層に由来する流れ堆積層（同 26 層）、明黄褐色泥土～砂泥で基盤層（同 31 層）である。

#### (2) 遺構

北区北西部では基盤層（図 5 - 27 層）上面が遺構面で、南東部は流れ堆積層（同 24 層）上面になる。この面で平安時代中期末から後期の南北溝 2 条、平安時代後期の南北溝 1 条、土坑、柱穴などを検出した。また、南区北西部には一部整地した中世層（図 6 - 11 層）があり、この層を除去して石列と礎石を検出した。同区南東部は基盤層（図 5 - 29 層）上面が遺構面となり、北区で検出した溝の南側部や石組遺構などを検出した。調査区全体では遺物の出土しない遺構が多い。

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代中期末 ～後期	土坑41、溝23、溝 5 B、溝 5 A、石組遺構49、 柱穴列 1（柱穴31・32・34）	
鎌倉時代 ～江戸時代	土坑10、集石54、石列55、礎石 1・2	土坑10は時期不明 (路面廃棄以降)

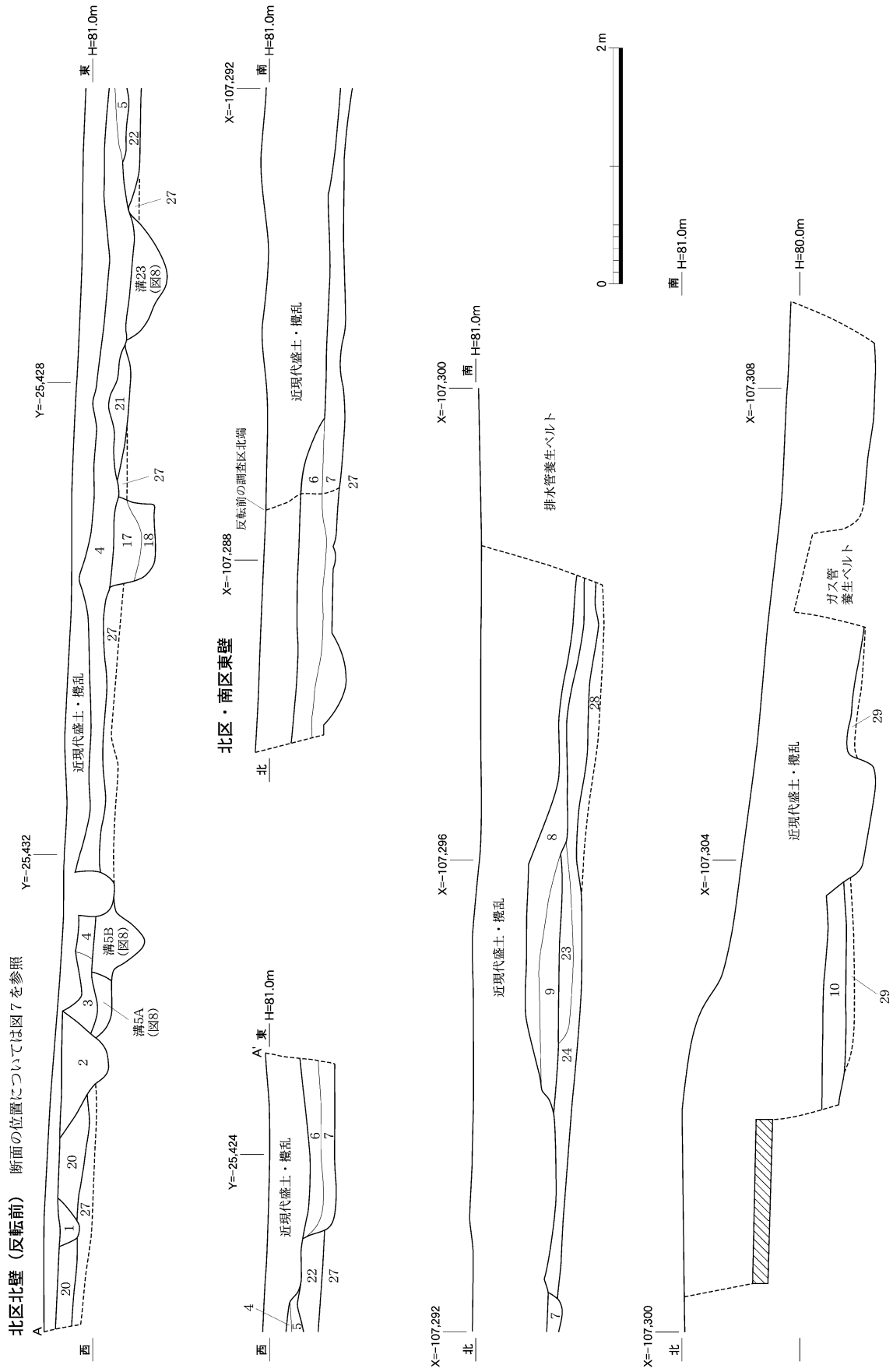


図5 調査区断面図1 (1:50)

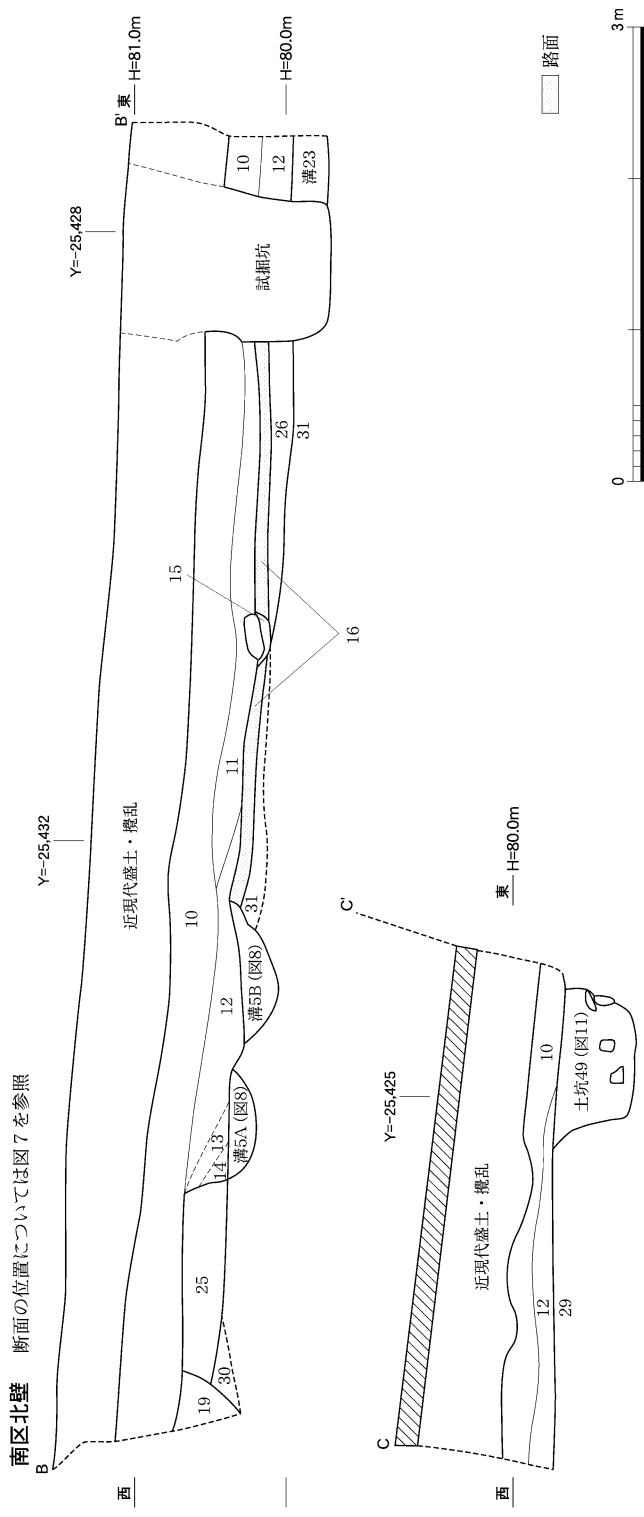


図6 調査区断面図2 (1:50)

- |  |   |
|--|---|
| <p>1 10YR4/4褐色泥土、礫径5cm以下ごく少量混 [溝59・近世]</p> <p>2 10YR5/4にぶい黄褐色泥土、礫径3cm以下ごく少量混 (1個径20cmあり) [土坑60・近世]</p> <p>3 10YR4/3にぶい黄褐色泥土、10YR5/6黄褐色～6/6明黄褐色泥土ブロック混、礫径3cm以下ごく少量混</p> <p>4 10YR4/3にぶい黄褐色～4/4褐色泥土、礫ほとんどなし</p> <p>5 10YR5/4にぶい黄褐色～2.5Y5/2暗灰黄色泥土、礫径3cm以下少量混</p> <p>6 7.5YR4/3～10YR4/4褐色泥土、礫径3cm以下少量混 [落込み29上層・中世]</p> <p>7 10YR5/4にぶい黄褐色～5/6黄褐色砂泥～泥土、礫径1cm以下ごく少量混 [落込み29下層・中世]</p> <p>8 10YR4/4褐色泥土、礫径10cm以下多量混</p> <p>9 7.5YR～10YR4/4褐色泥土、礫径10cm以下少量混</p> <p>10 7.5YR4/4褐色泥土、礫径1cm以下少量混</p> <p>11 7.5YR4/6褐色泥土、礫径1cm少量混</p> <p>12 7.5YR～10YR4/6褐色泥土、礫径5cm以下少量混</p> <p>13 7.5YR4/3にぶい褐色～10YR4/3にぶい黄褐色泥土、礫ほとんどなし</p> <p>14 7.5YR4/4褐色泥土、礫ほとんどなし</p> <p>15 7.5YR4/6褐色泥土、礫ほとんどなし</p> <p>16 10YR5/6黄褐色泥土、礫径3cm以下部分的に多量混 [路面]</p> | <p>17 2.5Y5/3黄褐色泥土、礫径3cm以下ごく少量混 [土坑13A上層・中世か]</p> <p>18 2.5Y5/2暗灰黄色泥土、礫径3cm以下少量混 [土坑13A下層・中世か]</p> <p>19 2.5Y5/2暗灰黄色泥土、礫径3cm以下少量混 [溝58・中世]</p> <p>20 10YR5/6黄褐色泥土、礫径3cm以下ごく少量混</p> <p>21 10YR4/4褐色～10YR5/4にぶい黄褐色泥土、礫径3cm以下ごく少量混</p> <p>22 10YR5/6黄褐色砂泥～泥土、礫径3cm以下ごく少量混</p> <p>23 7.5YR～10YR4/4褐色泥土、礫径1cm以下少量混</p> <p>24 7.5YR4/6褐色～5/6明褐色泥土、礫径4cm以下ごく少量混</p> <p>25 7.5YR5/4にぶい褐色泥土、礫径3cm以下少量混</p> <p>26 7.5YR5/4にぶい褐色泥土、礫径1cm以下少量混</p> <p>27 10YR5/6黄褐色泥土、礫径3cm以下中量混 [基盤層]</p> <p>28 7.5YR5/6明褐色～10YR5/6黄褐色泥土、礫径3cm以下部分的に多量混 [基盤層]</p> <p>29 10YR5/6黄褐色～6/6明黄褐色泥土、礫径3cm以下中量混 [基盤層]</p> <p>30 10YR6/6明黄褐色泥土、礫径1cm以下ごく少量混 [基盤層]</p> <p>31 10YR6/6～6/8明黄褐色泥土～砂泥、礫径1cm以下ごく少量混 [基盤層]</p> |
|--|---|

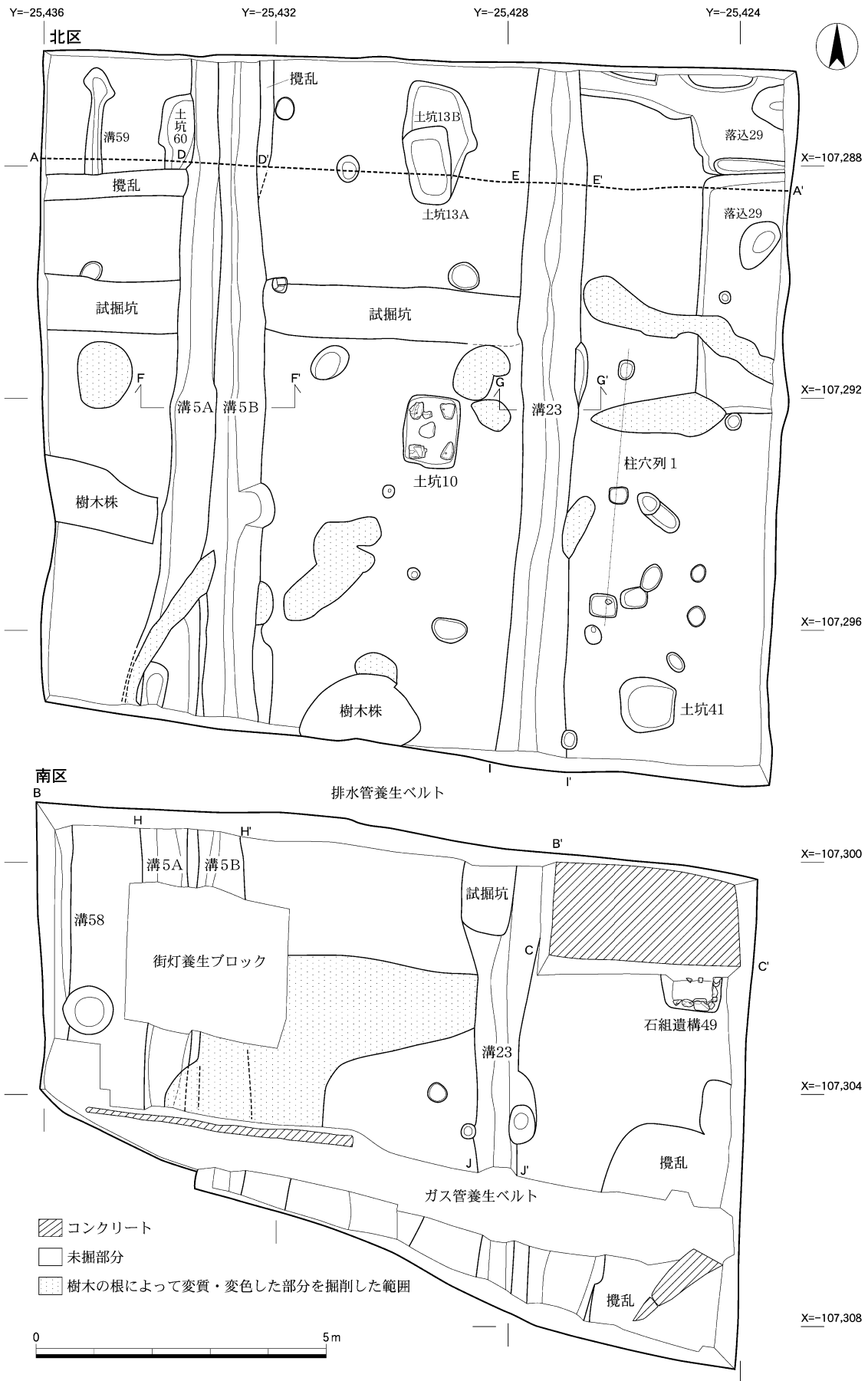


図7 遺構平面図 (1:100)



また、樹木の根の痕跡と思われるものを多く検出した。根や株の残存状況・土質などから、それらと確定できたものは明記した。なお遺構番号は掘削順に付したため前後する。

溝 23 (図 7・8) 調査区東側で検出した。規模は、検出長が南北約 21 m、さらに調査区外の北と南に延びる。幅は 0.7 ~ 1.3 m、深さは 0.25 ~ 0.45 m を測る。方位は北に向かって東へ約 3 度傾く。埋土は褐色~にぶい黄褐色泥土を主体とする。11 世紀後半の土師器皿が多量に出土した。

溝 5 B (図 7・8) 調査区西側で溝 5 A の下層で検出した。規模は、検出長が南北約 18.5 m、さらに調査区外の北と南に延びる。幅は 0.7 ~ 0.9 m、深さは 0.3 ~ 0.45 m を測る。方位は北に東へ向かって約 3 度傾く。埋土は褐色~にぶい黄褐色泥土を主体とする。11 世紀後半の土師器皿が多く出土した。

溝 23 と溝 5 B の溝心心間の距離は 5.0 ~ 5.5 m であり、南側ではやや狭くなる。また、溝間の調査区断面を観察した結果、北区南壁と南区北壁において、小礫が多く混じる黄褐色~褐色泥土 (厚

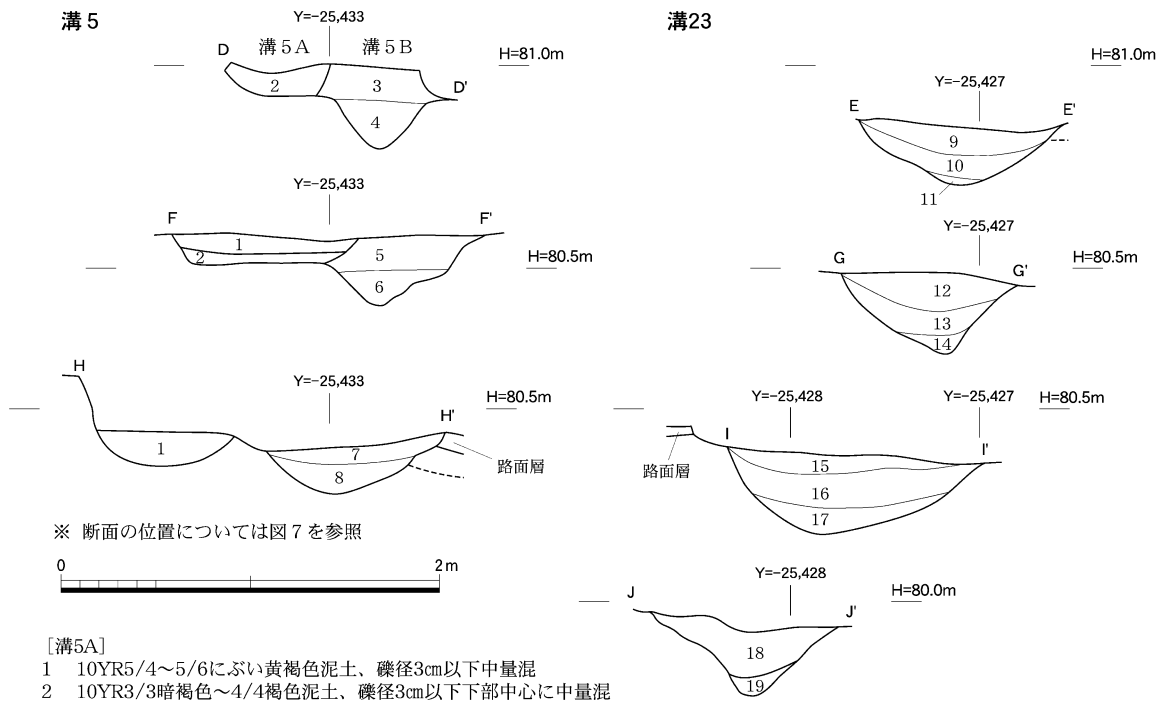


図 8 溝 5・23 断面図 (1 : 40)

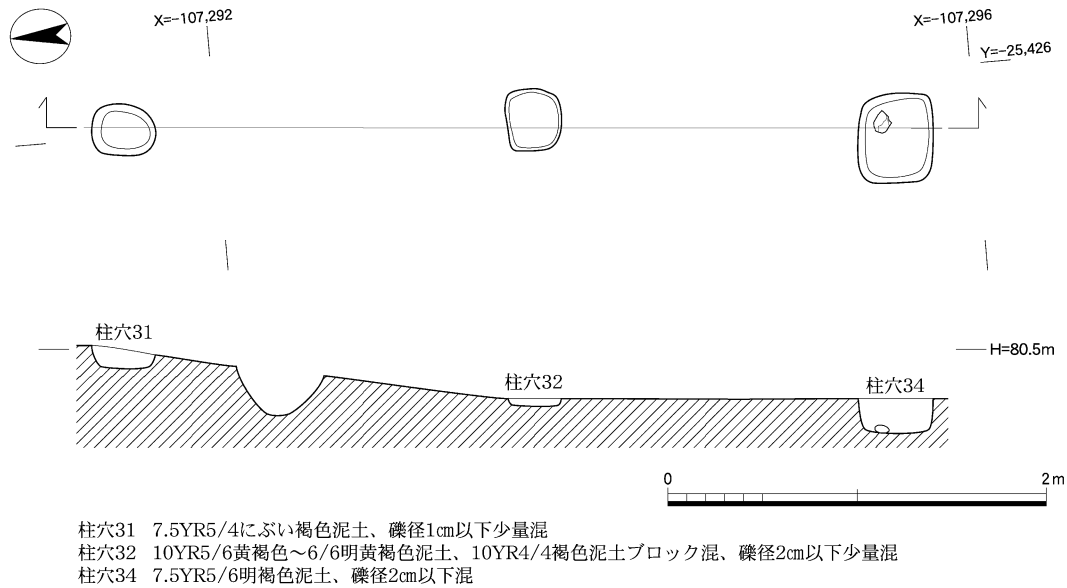
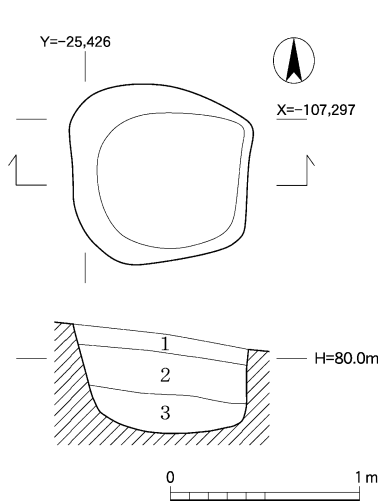


図9 柱穴列1実測図(1:40)

さ5～10cm)の層を検出した。この層は路面を形成する層と想定され、溝23と溝5Bはほぼ同時期の溝であることから、両溝は道路側溝と考える。

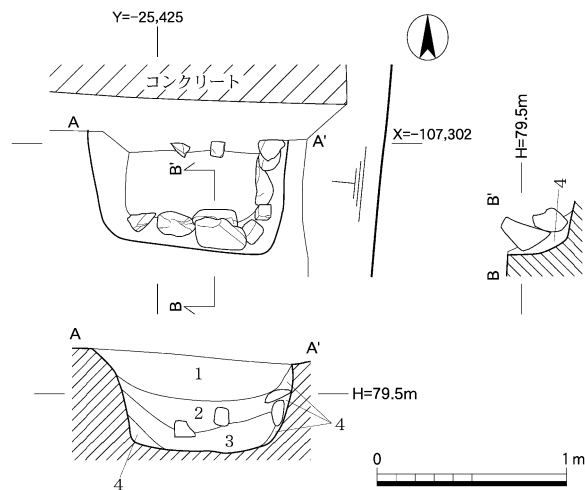
柱穴列1(柱穴31・32・35)(図9)北区東部で南北に2間分を検出した。柱間は約2.1m、方位は北に向かって東へ約5度傾く。柱穴規模は、一辺0.2～0.45m、深さ0.02～0.2mを測る。柱穴底部標高は北と南では約0.65m低い。形状は隅丸方形である。埋土は泥土で小礫が混じる。出土遺物はない。溝23にほぼ平行していることから、道路や溝に伴う柵列の可能性がある。

土坑41(図10)北区南東部で検出した。規模は、一辺0.6～0.8m、深さは約0.6mを測る。形状は隅丸方形である。埋土は褐色～にぶい褐色泥土である。11世紀後半の土師器皿が出土した。



- 1 7.5YR5/4にぶい褐色～4/4褐色泥土、礫径3cm以下少量混
- 2 10YR4/4褐色泥土、礫径2cm以下微量混、木の根多量に残る
- 3 10YR5/4にぶい黄褐色～4/4褐色泥土、礫径2cm以下中量混

図10 土坑41実測図(1:40)



- 1 7.5YR4/3褐色～5/3にぶい褐色泥土、礫径5cm以下中量混
- 2 7.5YR5/4にぶい褐色～10YR5/4にぶい黄褐色泥土、礫径10cm以下中量混
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、礫径3cm以下中量混(径1cm以下の小礫～粗砂多い)
- 4 10YR5/2灰黄褐色砂泥、礫径3cm以下中量混

図11 石組遺構49実測図(1:40)

溝 5 A (図 7・8) 調査区西側で検出した。溝東側の一部が溝 5 B と重なる。溝 5 B の埋没後掘りなおした溝と考えられる。規模は、検出長が南北約 18 m、さらに調査区外の北と南に延びる。幅は 0.5 ~ 0.9 m、深さは 0.15 ~ 0.2 m を測る。方位は北に向かって東へ約 3 度傾く。埋土は褐色~にぶい黄褐色泥土である。12 世紀前半の土師器皿が多く出土した。

石組遺構 49 (図 11、図版 2-1) 南区北東部で南半部を検出した。

規模は、東西が約 1 m の方形である。深さは約 0.5 m を測る。一辺 0.1 ~ 0.3 m の河原石と角張った石で壁際を囲み、2 段積み重ねる。西側は抜き取られている。埋土はにぶい褐色泥土が主体であり、礫が混じる。遺物は平安時代のもと考えられる須恵器小片が 2 片出土した。遺構の成立面から平安時代後期と考える。墓である可能性が考えられたが、埋土から骨片は検出されず、性格は不明である。

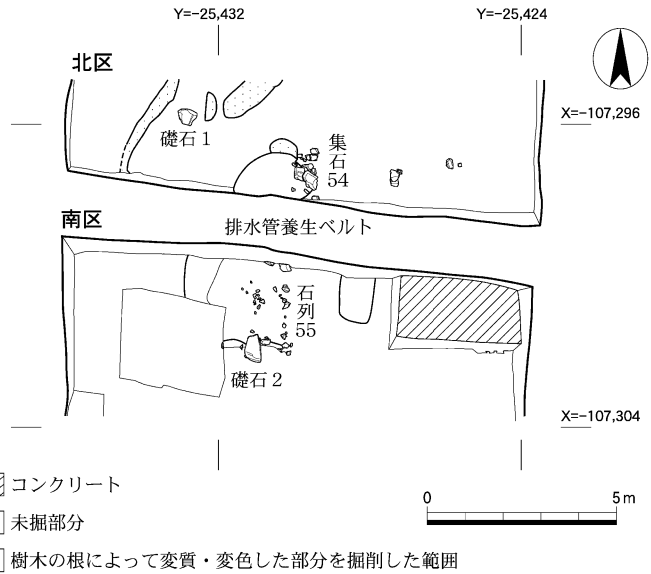


図 12 中世の遺構平面図 (1:200)

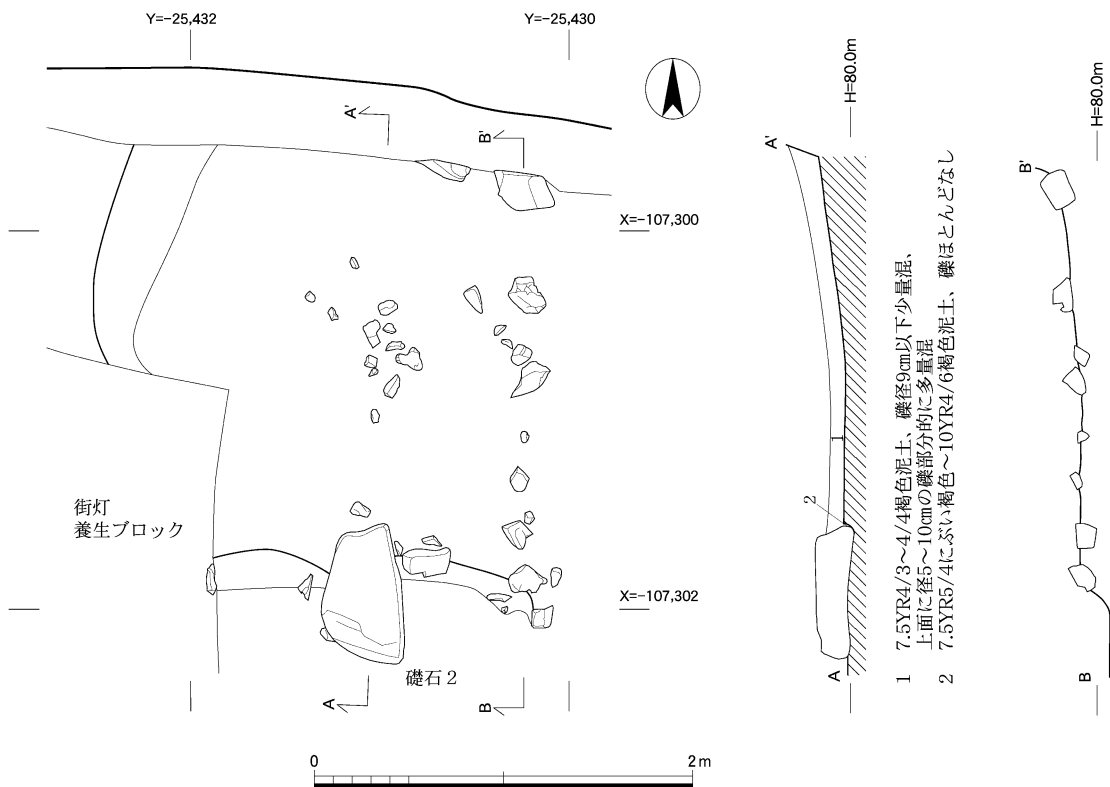
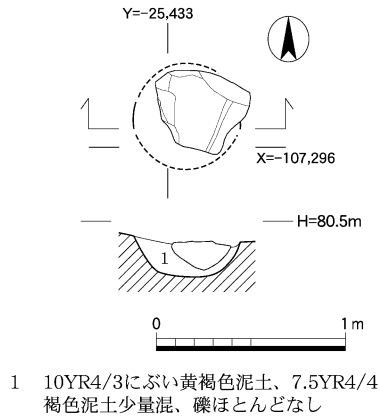


図 13 石列 55・礎石 2 実測図 (1:40)



1 10YR4/3にぶい黄褐色泥土、7.5YR4/4褐色泥土少量混、礫ほとんどなし

図14 礎石1実測図(1:40)

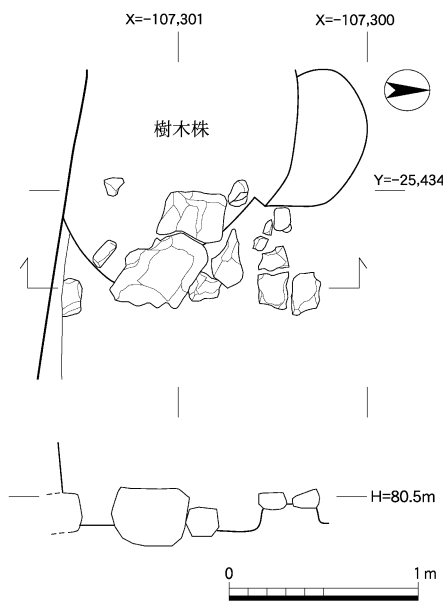
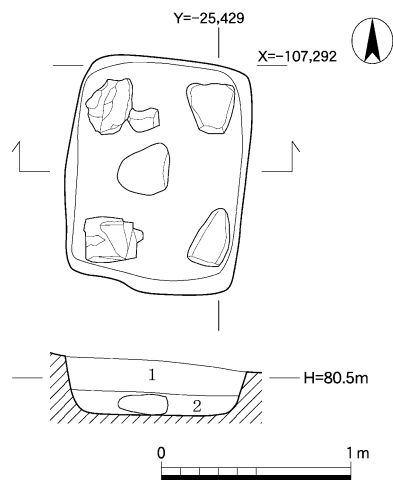


図15 集石54実測図(1:40)



1 7.5YR5/4にぶい褐色砂泥  
2 10YR5/6にぶい黄褐色砂泥、炭多量混

図16 土坑10実測図(1:40)

石列55・礎石2(図12・13、図版2-2)南区北西部で南北約2.4m、東西約1.8m、礎石2を伴う石列を検出した。両石列は北と西の養生ベルト内に延び、南西隅で直交し角を作る。石は径0.05~0.3m、厚さ0.05~0.15mを測り、角張った不定形である。南北石列は0.3~0.5mの間隔でならぶ。石列の西側と東側の埋土は明瞭な違いは認められない。東西石列は礎石2を伴い、まばらに石がならび、0.1~0.2mの段差がある。これらに囲まれた北西部は壇状になり、何らかの施設と考えられる。礎石2は一辺が0.25~0.75m、厚さ約0.2mを測る。形状は南北に細長く、河原石であり、上面が平らであることから礎石と考えている。この石列と礎石の覆土(褐色泥土)から12世紀後半~13世紀初頭の土師器皿が出土した。

礎石1(図12・14)北区南西部で溝5Bに重複し、検出した。一辺0.4~0.5m、厚さ約0.15~0.2mを測る。台形状の角張った石である。断面で確認した掘形埋土は、にぶい黄褐色泥土である。出土遺物はない。溝を掘り込むことから、時期は溝5B廃棄以降である。

集石54(図12・15、図版2-3)北区南部中央で検出した集石遺構である。その範囲は、南北約1.4m、東西約0.7mを測り、南側は北区外に延びる。東側はほぼ南北に並ぶ。石は一辺0.1~0.5m、厚さ0.1~0.3mを測り、大半が方形であり、角張る。集石は前述の路面層直上にあり、出土遺物はない。

土坑10(図16、図版2-4)北区中央部で検出した。短辺約0.9m、長辺約1.2m、深さ約0.3mを測る。形状は長方形である。土坑の4隅と中央に石が据えられ、計6石ある。南西隅はチャート、残りは河原石である。上面は平らで一辺0.1~0.3m、厚さ0.1~0.15mを測る。方位は北に向かって東へ約3度傾く。埋土はにぶい褐色~にぶい黄褐色砂泥である。出土遺物はない。路面を掘り込むことから、時期は路面廃棄以降である。何らかの施設の基礎と考える。

## 4. 遺 物

### (1) 出土遺物の概要

古墳時代と平安時代から江戸時代の遺物が出土した。平安時代の遺物が大半を占める。他の時代の遺物は少量である。

古墳時代の出土遺物には、須恵器高杯・蓋などがある。

平安時代の遺物は、溝5A・5B・23から出土した平安時代中期末から後期の土師器皿片が大半を占め、磨滅の激しいものが多い。その他に土師器高杯・甕、須恵器椀・鉢・壺・甕、緑釉陶器椀皿類、輸入陶磁器の白磁椀皿類、瓦器椀がある。瓦には丸瓦、平瓦がある。

鎌倉時代から江戸時代の遺物には、土師器皿、瓦器鍋・羽釜、陶器壺、染付陶磁器椀、白磁椀、施釉陶器鉢、輸入陶磁器の青磁椀皿類がある。瓦には近代のものがあり、棧瓦が大半を占める。

ここでは比較的残存状態の良いものを図示し、記述する。なお土器の口径値は復元値であり、土器の年代については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」(『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年)に準拠した。

### (2) 出土土器類 (図17、図版3)

出土した土器は小片が多く、残存状態の良好なものを図示した。

溝23出土土器(1～7)(1)は須恵器高杯である。杯部は口径16.7cm、高さ4.0cmである。体部は内湾して立ち上がり、端部は丸く収める。脚部は取り付け部で、径約4.4cmである。外面はロクロ成形の後全面に幅0.3～1.0cmのタテ方向のケズリで面取りを施し、断面形は多角形である。脚部は四方透かしになる可能性がある。(2)は1と同一個体と考える須恵器高杯の下部である。脚部から裾部は、外反し、端部は丸く収める。高さ2.3～3.0cmから上部は面取りと透かしが施される。1と考えあわせると長脚2段透かしと考えられる。裾部口径は13.4cmである。古墳時代後期に属する。(3～5)は土師器皿Aで、口径9.6～10.4cm、器高1.4～1.6cmである。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代後期	須恵器	6箱	須恵器2点	少量	少量
平安時代中期～後期	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、輸入白磁、瓦		土師器15点、瓦器1点	3箱	2箱
鎌倉時代～江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、輸入青磁、瓦	4箱	土師器3点、陶器2点	1箱	2箱
合 計		10箱	23点(2箱)	4箱	4箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

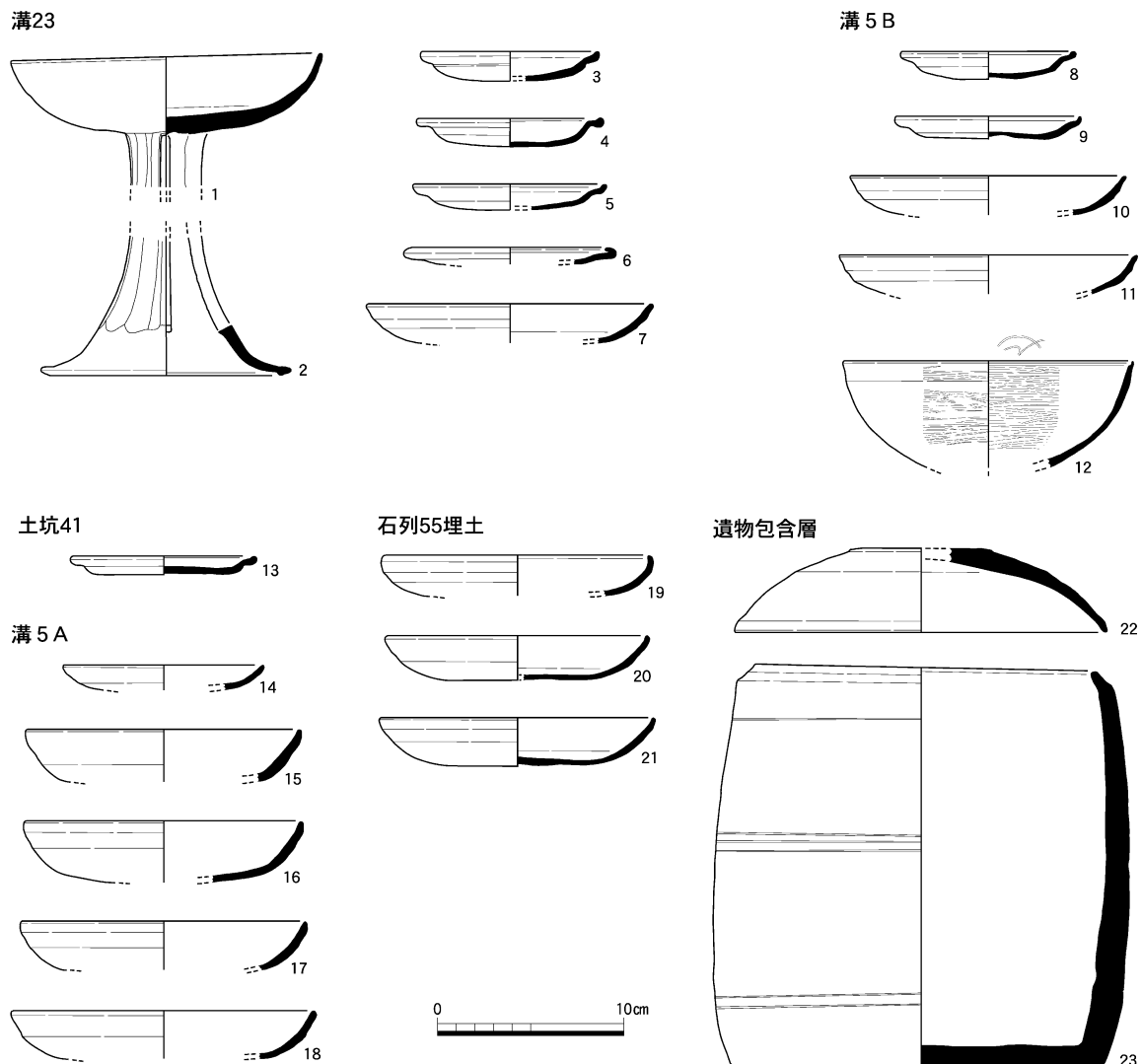


図17 出土土器実測図（1：4）

口縁端部をつまみ上げる。(6)は土師器皿Acで、口径11.4cm、残存高0.9cmである。口縁端部を内側に屈曲する。(7)は土師器皿Nで、口径15.4cm、残存高2.1cmである。体部は内湾して立ち上がり、端部はやや内傾する。外面は2段凹みナデを施す。3～7はIV期新～V期古に属する。

溝5B出土土器(8～12)(8・9)は土師器皿Aで、口径9.4・10.0cm、器高1.3・1.6cmである。口縁端部をつまみ上げる。(10・11)は土師器皿Nで、口径14.8・16.0cm、残存器高2.1cmである。体部は内湾して立ち上がり、端部は外反気味である。外面は2段凹みナデを施す。8～11はIV期新～V期古に属する。(12)は瓦器椀で、口径15.6cm、残存高5.7cmである。体部は内湾して立ち上がり、口縁部内面に沈線を施す。外面、内面にヘラミガキを施す。内面は丁寧なヘラミガキである。底部内面には暗文が施される。時期は11世紀後葉～12世紀初頭に比定できる。

土坑41出土土器(13)(13)は土師器皿Aで、口径10.0cm、器高1.0cmである。IV期新～V期古に属する。

溝5A出土土器(14～18)(14～18)は土師器皿Nである。14は、口径10.4cm、残存高1.5cmである。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部をつまみ上げる。外面は2段ナデを施す。15～

17は、口径14.8～15.4 cm、残存高2.6～3.3 cmである。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は三角形状に近い。外面は2段ナデを施す。18は、口径16.4 cm、残存高2.6 cmである。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く収める。外面は2段ナデを施す。14～18はV期中～新に属する。

石列55埋土出土土器(19～21) (19～21)は土師器皿Nである。19は口径14.6 cm、残存高2.2 cmである。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は内傾する。外面は2段ナデを施す。20・21は口径14.2～14.8 cm、器高2.4～2.6 cmである。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は三角形に近い。外面は1段が凹む2段ナデを施す。19～21はV期新～VI期古に属する。

遺物包含層出土土器(22・23) (22・23)は対になる陶器の蓋と壺である。南区中央部南端の基盤層の上の遺物包含層から出土した。22は蓋で、口径20.0 cm、器高4.5 cmである。上面は糸切りを施し、平らである。天井部から口縁部は内湾して延び、口縁端部は丸く収める。内面は丁寧なナデ、外面は粗いナデを施す。23は壺本体である。口径18.4 cm、最大径22.4 cm、底部径20.2 cm、器高21.1～21.5 cmである。体部は底部から屈曲して立ち上がり、わずかに内湾する。口縁部は内側へ傾斜させ、外側にわずかな段を付け、蓋の受けとする。内面はナデを施し、粘土輪積みの痕跡が残る。外面は丁寧なナデを施すが、最下部の2.5～3.5 cmはナデを施さない。外面の上部に1～2本、中央部に2～4本、下部に2本のヘラ描きの沈線が巡る。幅は0.5～1 mmである。ほとんどの沈線はナデ調整によって消され、途中で途切れる。時期は室町時代であり、蔵骨器として使用されたものと考えている。

## 5. ま と め

遺構について 今回の調査で検出した主な遺構は、路面と道路に伴う両側溝であり、平安時代後期中頃には廃棄される。その後、新たに西側に溝が掘られるが、平安時代後期末頃には廃棄されてしまう。鎌倉時代に入り、調査区南側では、削平を伴う整備がなされるが、何らかの施設がつくられたと考えられる。

出土遺物について 3条の南北溝からは、平安時代後期を主体とする土師器皿片が多く出土している。また、少量ながらも緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦なども出土している。このことは、調査区近隣にこれらを使用した何らの施設などあったことが窺え、その中には瓦を使用した建物などがあった可能性を示している。溝から出土した古墳時代の須恵器は、存在が知られている衣笠山の古墳の周囲などから二次的に混入したものであろう。また、南区南端では室町時代の蔵骨器と思われる壺が出土している。

徳大寺の史料について 調査地近隣は、徳大寺(得大寺)の推定地<sup>1)</sup>である。『山城名勝志』<sup>2)</sup>では「龍安寺興-等持院-間在、地輿-得大寺-同所也」とあり、それは今回の調査地に隣接していたと考えられる。史料の初見は、平安時代中期の『左経記』<sup>3)</sup>長元8年(1035)8月6日条「去夜右兵衛督尊堂卒去、寅剋入棺、今夜可移徳大寺云々」である。『大日本史料』<sup>4)</sup>には康和4年(1102)4月6日条に、徳大寺で卒去した東寺長者権大僧都頼観は徳大寺僧都と呼ばれていたと記す。『中右記』<sup>5)</sup>天永2年(1111)11月15日条には、藤原宗忠が寛智律師の病を得大寺北僧房に見舞ったと記す。『台記』<sup>6)</sup>久安3年(1147)6月5日条には、藤原実成が徳大寺辺に堂を建て供養したと記す。『百鍊抄』<sup>7)</sup>保元元年(1156)5月22日条には、徳大寺堂が放火によって焼失したと記す。『山槐記』<sup>8)</sup>永暦元年(1160)9月20日条には、得大寺には馬場があると記す。『親長卿記』<sup>9)</sup>文明6年(1474)7月13日条には、甘露寺親長が仁和寺に詣でた時、徳大寺旧跡を見回ると、荒野のようで寺や家がなく、荒野と墓所に分けられると記す。

また、藤原実成(975～1045年生没)は衣笠山の南西麓に山荘と寺院を営み、その寺院を徳大寺と呼んでいたようである。<sup>10)</sup>この山荘と寺院は、藤原公成・公実・実能と伝領され、徳大寺家の祖・実能(1096～1157年生没)以後、この家系に伝領されたが、宝徳2年(1450)に細川勝元がこの地を譲り受けて龍安寺を創建し、現在に至る。<sup>11)</sup>

今回検出した平安時代後期の遺構群は、前述した徳大寺の史料の時期である11世紀～12世紀中頃に納まる。この遺構群が徳大寺に関連するものであることを裏付ける史料は見られないが、これらの遺構群の検出は、徳大寺や山荘が営まれた時期に衣笠山南麓にも開発が及んでいたことを示す重要な調査成果である。また、中世の蔵骨器と思われる壺が出土したことから一部墓所に利用された可能性も考えられる。

### 註

1) 『平安時代史辞典(下)』「徳大寺・徳大寺家」の項 角川書店 1994年



- 2) 『新修 京都叢書』第十三卷(山域名勝志) 臨川書店 1968年
- 3) 『増補 史料大成』第六卷(左経記) 臨川書店 1965年
- 4) 『大日本史料』第三編之八 堀河天皇 財団法人東京大学出版会 1934年 覆刻 1990年
- 5) 『増補 史料大成』第十二卷(中右記四) 臨川書店 1965年
- 6) 『増補 史料大成』第二十三卷(台記一) 臨川書店 1965年
- 7) 『新訂増補 国史体系』(百鍊抄) 吉川弘文館 1979年
- 8) 『増補 史料大成』第二十六卷(山槐記一) 臨川書店 1965年
- 9) 『増補 史料大成』第四十一卷(親長卿記一) 臨川書店 1965年
- 10) 註1に同じ
- 11) 『京都市の地名』日本地名大系27 平凡社 1979年



# 圖 版



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	りょうあんじごりょうのしたちょういせき							
書名	龍安寺御陵ノ下町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-5							
編著者名	布川豊治							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
りょうあんじごりょうの 龍安寺御陵ノ したちょういせき 下町遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 りょうあんじごりょうのした 龍安寺御陵ノ下 ちょうちない 町地内	26100	938	35度 01分 57秒	135度 43分 17秒	2010年6月 28日～2010 年8月2日	239m <sup>2</sup>	新体育館 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
龍安寺御陵ノ 下町遺跡	散布地	平安時代中期 ～後期	溝、石組遺構	土師器、瓦器、輸入陶 磁器		平安時代中期末か ら後期前半の側溝 を伴う路面を検出 した。		
		鎌倉時代 ～江戸時代	集石、石列、礎石	土師器、陶器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-5

## 龍安寺御陵ノ下町遺跡

発行日 2010年9月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社  
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961